スモン調査研究協議会研究報告書

No.5

昭和45年度疫学班保健社会学部会研究報告

—スモンに関する保健社会学的研究—

昭和46年7月

スモン調査研究協議会

スモンに関する保健社会学的研究

班　　員　宮坂忠夫（東大医学部保健学科）

研究協力者　園田恭一
藤岡千秋
飯島伸子
山田いく
須田和子
片平洌彦
高木邦明
大崎文子
川村佐和子
矢野正子
（同　　上）

目　　次

序

序章1.　研究目的と研究方法 …… 1

2.　調査対象地域の概要 …… 1

第Ⅰ章　スモンの発生・診断・受療過程 …… 4

第1節　調査対象者の特性と現在の病状 …… 4

1.　調査対象者の発生時期別分布 …… 4

2.　調査対象者の年令分布および男女別構成 …… 5

3.　現在の病状 …… 5

第2節　スモン患者の診断過程 …… 11

1.　診断の時期 …… 11

2.　SMON を最初に診断した医療施設 …… 11

3.　診断に関する問題点 …… 12

第3節　スモン患者の受療過程 …… 13

1.　受療施設の種類と数・患者数 …… 13

2.　通院の状況 …… 15

3.　入院の状況 …… 16

4.　医師の説明・指導について …… 18

5.　転医の状況とその理由 …… 18

6.　機能訓練の実施状況 …… 20

7.　治療中断の状況とその理由 …… 22

第Ⅱ章　支払った医療費と発病による仕事や生活条件の変化 …… 24

第1節　医療費負担の実態と支払い方法 …… 24

1.　支払った医療費 …… 24

2.　調査対象者の医療保険適用の状況 …… 24

3. 家族1人当年収の医療費負担率 …… 25
4. 医療費の支払い方法 …… 29

第2節 発病による仕事や生活条件の変化 …… 34
1. スモン発病前後での職業や収入の変化 …… 34
2. 生活変化の現実 …… 39
3. 仕事をやめた人の身体的症状と今後の医療費負担 …… 43

第Ⅲ章 患者の悩み・不満・要望と問題解決の方向 …… 49

第1節 患者の悩みや苦痛 …… 49
1. 身体的苦痛と社会的苦痛 …… 49
2. 地域からの疎外と家庭の崩壊 …… 50

第2節 社会復帰の実情と問題点 …… 52
1. 復帰の実情 …… 52
2. 社会復帰の障害 …… 54

第3節 マス・コミの報道 …… 56
1. マス・コミ報道の実態 …… 56
2. 患者のマス・コミ観 …… 57

第4節 医師以外の療法への依存 …… 58
1. 依存の度合と評価 …… 58
2. 民間療法への依存を生む基盤 …… 60

第5節 「スモンの会」の動向と患者の期待 …… 61
1. スモンの会の動向 …… 61
2. スモンの会への加入の有無 …… 62
3. スモンの会への要望事項 …… 63

第6節 国(厚生省)およびスモン協議会への要望事項 …… 64

1. 国（厚生省）への要望事項 …… 64
2. スモン調査研究協議会への注文 …… 65
3. 「原因究明」を求めるもの …… 67

第7節 疾病の原因と医療費の負担方法 …… 68
1. キノホルム説とその社会的影響 …… 68
2. 医療費の個人的負担と社会的負担 …… 69
3. 医療費負担の考え方とその基盤 …… 70

スモン問題年表 …… 73

SMON調査表 …… 97

SMON調査地域別単純集計表 …… 111

報告書要約 …… 123

序

すでにスモン調査研究協議会第１ないし第４集を刊行し、主として昭和４５年度までの疫学，病因，病理，臨床に関する研究成果を世に問うた。

昭和45年度以降、同調査研究協議会の疫学班の中に保健社会学的研究を行なうグループを設け、その研究を委託するに至ったのは、スモンが単なる神経病であるにとゞまらず、患者の治療費負担の増大、社会における疎外など単なる医学的問題を超え保健社会学的な研究を必要とするに至ったからである。そもそもかゝる声は調査研究協議会員の内部からも、また患者側からも起り、とくに後者からは調査研究協議会の研究が医学研究に偏向しているという批判さえ生れたほどである。

このような背景の下に昭和４５年度から保健社会研究グループの誕生をみ、本病流行地である埼玉県戸田地区および岡山県井原地区において調査が行なわれ、その研究成績をスモン調査研究協議会研究報告書第５集として世に送る次第なのである。

研究報告書第１～４集に明らかなように、スモンの病因に関する研究は大幅に進歩し、キノホルムはなお原因と断定するには至っていないが、スモン発症に対する影響は何人も否定できず、その発売停止処置が新患発生の大幅な減少となって現われている。

調査の時点と現在では患者側および一般人のスモンに対する意識にも大きな変化がみられるのは当然であり、これらは次回に発表される成績と比べると興味深いであろう。一方今後はリハビリテーションが患者に対する医学的アプローチの主流となると考えられるので、患者および多発地域社会の保健社会学的な研究が色々な意味で役に立つ時代が来るに違いない。この意味でこの研究報告書第５集は大きな意義を有することを信じて疑わない。

昭和４６年　７月

スモン調査研究協議会

会長　甲野礼作